

対等のようであるが、『往生論』自身が示すように五念門は次第順序をもつて次第順序をもたない、否そうしたことを問題視しない五種正行と相異するところがある。

以上概略、五念門と五種正行について三つの観点から相異のあることを指摘したのである。これによると五種正行は五念門がもつ往生浄土行とその得益という二つの面を切りはなして、得益を同時に示さないで、もつばら往生浄土行のみを示すものとして純化されたことは事實である。又第一の観点によると五念門も五種正行も、先に指摘した点をのぞけばすべて阿弥陀仏にかかわる行であることには変りがない。然し阿弥陀仏に関する學と善導との見解に相違のあることを見逃してはならない。即ち疊は阿弥陀仏を実相身為物身というようならへ方をしてゐるのに反し善導は本願成就身（酬因感果身一報身）としてとらえているように、疎密の相違のあることを忘れてはならない。しかし兩者とも阿弥陀仏の本願力（疊は第十八、第十一、第二十二の三願を、善導は第十八願のみを強く主張してゐることは事実である。しかし第三の観点に至ると阿弥陀仏の本願力の強調の仕方

に疎密の差が明確にあらわれてくる。疊は『往生論』の五念門に註釈を加えたのであり、善導はそれにもとづきながらも脱皮して新しい実践体系を樹立した点で一概には論じ得ないことは当然のことである。五種正行が称名の一行にしばられるということはそれが本願行であり本願の聖意にかなう行であるからである。かく本願行としての称名正行を正定業とし、他の四正行を非本願行ではあるが称名の助業というように区別をしているが、この中本願行としての称名正行は第二讃歎門釈を中心とした、疊の名号釋と本願釋とに負うところが大きい。

註

- ① 淨全二 五八頁下
- ② 淨全一 二四〇頁上
- ③ 淨全一 一九七頁―一九八頁
- ④ 淨全一 二三九頁下―二四〇頁上

道綽禪師の聖淨二門判

仏教の經典はすべて釈尊が一生の間に説かれたのであつて、これを金口の説法として受けとつた中国の信徒たちは、その説法形式や説法の順序、更にはその内容によつて分類し、価値づけて、仏の眞の意圖を探索したのであつたが、道綽禪師は内容の優劣ということよりもむしろ釈尊が説かれた教え（教）そのものを、末法時の現代（時）に生きている私（機）が実践しうるか否かという観点に立つて聖淨二門の分判を試みたのである。そうした実践的立場に立つた教判は、内容を優劣した教判と同格に扱うことはできない。教相判釈とは呼び得ない独自性をもつものである。

この道綽の聖淨二門の成立に關しては、上述のような「時」と「機」とについて道綽をして注目せしめるような時代相、社会相を検討して見る必要がある。即ち道綽の在世時の中国は、一般歴史の上からみても、仏教界の動向からみても一つの転換期にかかつていたのである。と、いうことは南北朝が崩れ去り、隋の時代、唐の時代と変遷し、その裏面には戦禍、天災、凶作によつて一般民衆は困窮にあえいでいた社会情勢、又仏教界では從來

の仏教を開拓して宗派建立の新しい波が押しよせてきていたのである。その裏面には僧尼の腐敗墮落や仏教弾圧がある。然る時に道綽は淨土教をうち立てたのである。

しかし道綽の聖淨二門判は、彼自身の独創ではあるがその中には行体としての竜樹菩薩の難易二道説、行縁としての曇鸞大師の難易二道、目他二力説が流れ込んでいることを忘れてはならない。さらに現在を末法時であると判断したのは『大集經』月藏分によつて末法思想うながされてのことであり、そうした伝承や末法時の自覚が一大仏教をして聖淨二門に分判せしめたのである。

かかる故に道綽は聖道門、淨土門の判釈をたてて、聖道の一種は今の時は釈尊既に世を去り給つてゐるから、釈尊の如き偉大なる宗教者の人格の薰陶をうけ得ないし加うるに自己の微力では到底悟りうることは出来ない。それ故に、唯淨土往生を約束する念仏の一門によるより外に仏果菩提に導入する道のないことを明示したのである。このことは阿弥陀仏の約束であり、釈尊も諸仏も証明しているところでもある。もしこの法によらなかつたならば、先死流転というきわめて苦しい境遇にあるもの

を救う道はない。といつて大警報を發せられたのである。

この時機相應の如何が聖道淨土二門を判ずる岐点になるわけである。そうした点で道綽の聖淨二門判は單なる教相の優劣を論じるものでなく、末法という時代において素質、能力の低い私が得説しうる道という観点に立つて一大仏教を分判したものである。この点他宗の教判に対して聖淨二門判が実践的性格をもつ所以である。

聖淨二門の分判は此土入聖と彼土往生というように區別されるが、前者はこの地上にあつてみづからの力によつて、天文学的表現を要するような長時間にわたつて、その所期の目的を達成するのに反し、後者はこの地上および彼土にあつて、阿弥陀仏の本願力を増上縁とすることによつて、すみやかに所期の目的を達成するものである。この点この現実の世界、地上に対する考え方、あるいは自己自身が有する仏道修業に要する素質、能力に関する考え方の相異が、聖淨二門を分判せしめるに至つたわけである。前者を釈尊の遺法である教法にもとづくものであるとするならば、後者は釈尊の如くこの地上に出て、この地上に死し給うような仏でなく、過現末三世

にわたつて永遠なる阿弥陀仏を信仰対象とし、しかもその阿弥陀仏の教えでなく、阿弥陀仏の本願力という救済にあずかるうとするものである。この点一は法をめぐる悟りの仏教であり、他は人格からにじみ出る慈悲を中心とした救いの仏教であると言ひ得よう。

こうした聖淨二門判が法然上人によつて継承され、『撰択本願念仏集』第一章に掲げられ淨土一宗の教判とされるに至つたことは意義深いことである。なぜならば、聖淨二門判は善導が使用したような頓漸二教という一般的な教判でなく、阿弥陀仏の救済にあずかるという淨土教の特色に基づいて、これを立場として一大仏教を分判したものであるからである。道綽の二門判を法然の二門判と比較すれば、その背景をなす時代の傾向、仏教界の動静を異にする点、一概に論じえないのは当然であるがしかし何れにしても聖淨二門判は時機教三者相應という視点に立脚して末法時の、一生造惡の機が生死を出離する最も適応した道として淨土門を鼓吹するものに外ならないのである。